

Karl Heinrich Ritter. *A History of Protestant Missions in Japan.*

リッター『日本プロテスタント・ミッション史』の研究

一ドイツ人牧師による初期日本プロテスタント宣教史とその視点―

東京キリスト教大学大学院2年
ブラウネル 礼

はじめに

研究は東京基督教大学大学院の修士論文として提出した「Karl Heinrich Ritter. *A History of Protestant Missions in Japan.* リッター『日本プロテスタント・ミッション史』の研究」を通して得られた成果を中心にまとめたものである。本研究は1885年の日本での宣教を開始したが、その自由主義神学の立場から日本の主流教会からは「破壊的」だと断罪され、敬遠された普及福音新教伝

道会の創設者の一人であるリッターの著作の初の翻訳研究である。本研究では、リッターの著作の英語版の増補改訂版から日本語に翻訳することを試み、その内容分析をした。横浜プロテスタント史研究会ではこの中から普及福音新教伝道会の宣教における神学的枠組み、原著者のリッターについて、そして「日本プロテスタント・ミッション史」として訳出したリッターの著作の最重要テーマである「日本の教会の独立、超教派」について紹介した。今回は本発表の要約をまとめた。

1. 普及福音新教伝道会について

1884年に設立された普及福音新教伝道会はアメリカやイギリス、カナダからのミッションに遅れて1885年に最初の宣教師であるシュピンナーを派遣しその活動を開始した。普及福音新教伝道会は、これまで批判的に評価されてきた。普及福音新教伝道会がそれまで日本の主流教会に宣教していた

目次 兼 研究発表リスト (その52)

第461回 2025年1月18日

リッター『日本プロテスタント・ミッション史』の研究

一ドイツ人牧師による初期日本プロテスタント宣教史とその視点―

……………ブラウネル 礼 …… 1

第462回 2025年2月15日

アメリカ・バプテスト派宣教師の活動

一ヒンチマンの平和思想から―

……………原 真由美 …… 3

第463回 2025年3月15日

「再臨」から見る戦時下キリスト教弾圧

一灯台社、ブリマス・プレズレンの検挙を中心に―

……………川 口 葉 子 …… 5

第464回 2025年4月19日

平田篤胤とキリスト教

一キリスト教受容の一側面として―

……………藤 原 直 美 …… 7

宮田皓坦さんを偲んで

……………岡 部 一 興 …… 8

佐々木敏郎牧師 逝く

……………花 島 光 男 …… 9

総会報告 (議事録)

……………中 島 耕 二 …… 10

事務局報告 横浜プロテスタント史研究会規約

……………事務局 岡 部 一 興 …… 10

編集後記

……………花 島 光 男 …… 10

アメリカやイギリスからのミッションと違って自由主義神学をその神学的枠組みとして採用していたからであり、主流教会の神学思想に大きな混乱をもたらしたからである。普及福音新教伝道会はそれまで神学研究の領域で展開されていた自由主義神学が海外宣教への実践にその神学を適応させようとした極めて斬新な運動であったのである。

普及福音新教伝道会の神学的背景は19世紀ドイツの自由主義神学だった。特に真に「ドイツ的」なものとして自らの神学をルター以来の宗教改革の延長にあること主張した。その目的は「純粋な福音」を追求し、それに基づいて宣教することであった。この「純粋な福音」あるいはその宣教師に言わせるなら「本原」と呼ばれた福音は教義や伝統から完全に切り離された解放された福音だった。そこに行き着くために普及福音新教伝道会は当時の代表的な神学者であるハルナックやトレルチの神学的基礎を用いたのである。これによって全ての宣教師団体は協力することが可能であると主張したのである。普及福音新教伝道会の目的は、日本ですでに宣教を展開していたアメリカやイギリスからのミッションに対立するためではなく、それらを援助しつつ協力して宣教することだった。この「純粋な福音」による統合が本研究で分析したリッターの著作における主題の理解の基礎にある。

2. リッターについて

「日本プロテスタント・ミッション史」の原著者であるカール・ハインリッヒ・リッター(K.H.Ritter)は普及福音新教伝道会の創設者の一人であった。ベルリン郊外の教会の牧師だったリッターは、普及福音新教伝道会の草創期から日本での宣教に関心を持ち、1884年に結成される時にはその規則をまとめる暫定理事として関わった。リッター自身が幼少期からの持病(くる病)によって日本の地での宣教は実現しなかった。リッターは、一度も日本に来ることなく、日本の初期のプロテスタント史を著した特殊な教会史家である。リッターの来日は叶わなかったが、リッターは日本に派遣される宣教師たちのメンタ的な人物として、また日本からの留学生への宣教を通して日本宣教に関わった。リッターは、本研究の「日本プロテスタント・ミッション史」だけで

なく、普及福音新教伝道会の機関紙で宣教師の情報から日本宣教の状況について報告し、文筆活動で最も貢献した。

3. 「日本プロテスタント・ミッション史」について

本研究の主題である『日本プロテスタント・ミッション史』は、リッターが普及福音新教伝道会の機関紙である。に1889年から1890年にかけて5回にわたって連載した文章をまとめて出版したものを当時日本で活動していた普及福音新教伝道会宣教師クリストリーブの編集の元、アメリカン・ボードのアルプレヒトの英訳とグリーンによる増補改訂を経て1898年に英語で出版された。

『日本プロテスタント・ミッション史』は1858年から1898年までの約40年を1858年-1872年「準備の時代」、1873年-1880年「土台づくりの時代」、1880年-1890年「より一般的な拡張の時代」とグリーンらによる1890年-1898年「試練の時代」の4つの時代に分けて構成されている。特にリッターが著した第一期から第三期までを一貫してリッターが関心を寄せて記述している主題は、日本のプロテスタント教会の超教派的な動き、合同への機運の高まりと失敗、海外ミッションからの独立である。リッターによるならば、日本のプロテスタント教会の「自立」「独立」と「超教派」「合同」は矛盾や相反するものではないという。むしろ、自立と独立の機運は高まるほど宣教を進めていくためには超教派で協力し、合同するべき必要性が訴えられるようになるというのである。リッターは日本のプロテスタント教会の海外ミッションからの独立、そして超教派での協力と合同を不可分のものとして理解していたのである。この視点はリッターの背景にある普及福音新教伝道会の神学の根幹になる「純粋な福音」による合同によって可能となる合同である。

結果的には失敗に終わる一致教会と組合教会の合同運動についてもリッターは「私たちが望みたいのは、これがただの先送りであって、組合教会とまた一致教会がこれまで些細なことや個人的な利害を二次的にしてきて、神の国のより大きな大義のために成してきた常識が、ついには今、この運動を失敗させてしまった障害を乗り越えることである。」と論じ、将来的には合同が必要であるという視点を持っている。リッターが特に注目し

ているのは、初期の横浜公会や札幌独立教会といった「独立教会」の存在である。

他にもリッターが著作で扱っているテーマには1880年代に勃興した「祈祷会とリバイバル運動」について、またドイツ語版原著ではリッターの視点からの普及福音新教伝道会についての記事、英語版ではクリストリーブによって差し替えられた普及福音新教伝道会についての紹介の記事なども含まれており、どれも普及福音新教伝道会の普及福音新教伝道会の日本キリスト教史に対する視点が述べられており、これまでにない日本キリスト教史の視点が論じられている特有な日本キリスト教史資料である。

4. 今後の研究課題について

最後に本研究からさらに発展させるために現時点で挙げられる今後の研究課題について言及して結ぶ。本研究は普及福音新教伝道会の研究のごく一部にしか過ぎない。普及福音新教伝道会に関連した著作や文章の研究は十分だとは言えない。本研究でも多く引用したが、日本の普及福音教会の機関紙である「真理」の基礎研究が待たれる。普及福音新教伝道会、また普及福音教会が自らをどのように書いていたのか、これまで「破壊的」と断罪され、これまで注目されてこなかったその宣教の実態と普及福音新教伝道会の神学の実践について研究する意義があると考ええる。

また、本研究も包括的な研究から程遠いと考ええる。リッターの原著のドイツ語版からの比較も含めドイツ語の資料を用いた研究を急がなければならないだろう。

本研究を通して普及福音新教伝道会についてわずかでも新たな視点を提供できたならば本望である。



アメリカ・バプテスト派宣教師の活動 ーヒンチマンの平和思想から

原 真由美（関東学院大学非常勤講師）

1941年の太平洋戦争開戦直後から戦争終結後の日本の在り方についてアメリカ政府はまず戦後の課題整理のために政府、民間団体により日本研究を行った。戦後すぐには日本の占領時代に民主化政策を推し進めた。アメリカ・バプテスト派の宣

教師でもあったホルトムは、ポツダム宣言受諾による敗戦後の日本の進むべき道として信教の自由、政教分離の提案をGHQにしており、その施策と重なっている。アメリカは国家神道のもと戦争へ進んだ日本人の国家主義観、家族主義観による人権意識の欠落をキリスト教を再移入することで個としての人権、信教の自由を確立しようとした。1947年米国・カナダの8教派の教会支援のためのIBC（Inter Board Committee for Christian Work in Japan）ミッションボード連合委員会の組織、日本側ではCOC（Committee of Cooperation）内外協力会を組織しているがアメリカ・バプテストはIBCには加わず、単一教派として宣教師の招聘や復興への財政援助を行った。*

*拙著『キリスト教宣教と日本—太平洋戦争と日米の動き』彩流社 2018年

共著『戦争と平和主義』富坂キリスト教センターいのちのことば社 2023年

アメリカ政府はポツダム宣言を受け入れる前からソ連の圧力が日本に及ぶことを危惧していたが、バプテスト派ではアメリカ政府とは異なる考えで日本に独自に貢献する計画を持っていた。1949年にChristian opportunity in Occupied Japan（日本宣教特別強化計画）を提案する。この計画には、主に若い宣教師の短期、長期の派遣人事案や、バプテストの女子校（日ノ本、捜真、尚綱）、日本の国内伝道やキリスト教を土台とするバプテストの高等教育機関の設立があった。*

*拙論「日本宣教特別強化計画と関東学院大学」キリスト教と文化第14号 2016年

アメリカ・バプテストから戦後派遣された宣教師主事に重要な働きをした宣教師としてアキスリング、フリデール、ヒンチマンがあげられるが、この中でヒンチマンは1950年から1964年の13年間の戦後復興期の日本宣教を担当するが、日本の経済復興を背景に再び高まりを見せた国家主義や、冷戦の勃発によるアメリカのアジアにおける反共軍事体制の中でどのような背景や理念を持って活動を行ったのであろうか。その出自と良心的兵役拒否、宣教師主事の働きから考察する。

ヒンチマンの出自について

William Lee Hinchiman（1921年12月1日—

2001年)は元関東学院院長であり、アメリカ・バプテスト宣教師である。ヒンチマンは、アメリカ合衆国ウェスト・ヴァージニア州ローガン群ローガン市近郊のマンに生まれる。ドイツ人の父親は、ペンシルヴェニアダッチと言われるドイツ人で、東ヨーロッパ、南ヨーロッパから多くの人がアメリカに入植していた。最初に通った教会は長老派の教会であったが、後に自身の信仰がバプテストであると自覚し、バプテスト教会へ移っている。

1939年に基督教の伝統と目的に基づいた教育目標を掲げたベレア大学に入学する。この大学は1885年に奴隷制廃止論者によって設立された大学でアメリカ南部で最初に黒人を受け入れ、男女共学を実施し人種や民族を超える神の愛を設立の精神としている。ヒンチマンが大学に在学していた町の教会で奉仕をしていた時期に第二次世界大戦で4人の息子が戦場へと徴兵され、その一人を失った父親にドイツのスパイと誹謗中傷を受けたことがあった。ファシズムの世界から逃れた移民の子であったのにスパイ容疑をかけられたのであった。*

*アメリカンバプテスト宣教師カード アメリカンバプテスト外国伝道協会図書館蔵

*関東学院史編集委員会『関東学院出版会』 関東学院出版会 2009年

*B.L.ヒンチマン『兄弟愛に生きる』 ポートサイド印刷 2005年

良心的兵役拒否について

アメリカ政府は絶対平和主義のメノナイト派、フレンド派等の特定の宗教のみに兵役拒否を認めていた。また良心的兵役拒否とは国家権力による兵役強制を自己の宗教的、倫理的、政治的良心に基づき拒否することをいうが、ヒンチマンはバプテスト信者であったがこの許可を得ている。

大学の2年時に徴兵通知を受けるが、兄弟である他の人間を憎み、殺害する戦争への参加は信条に反するとして兵役につけない代わりに奉仕活動を申し出る手紙を徴兵委員会に送った。1940年にアメリカ政府はメノナイト派、フレンド派、プレズレン派のみに認めていた兵役免除が選別訓練砲兵法により路線変更され、宗派を問わず「宗教的教育および信念を理由」とするよう権利が拡大した、その結果これまで認められていなかったバプ

テスト派や諸派も対象となり、ヒンチマンは引き続き大学生活を継続することになる。

彼のこのような行動にはドワイト・ムーデイの存在が影響を与えた。ムーデイはアメリカの大衆伝道者でムーデイ聖書学院の創設者であったが、キリストに仕える者の役割は平和を造り出すという平和主義思想の持ち主であった。ムーデイが南北戦争以前からの奴隷制度廃止論を唱え北軍に徴兵されなかった時に良心に従い兵役拒否をしたこともヒンチマンの平和思想の萌芽となっていた。

ヒンチマンは大学卒業後ケンタッキー州の南部バプテスト・ルイビル神学大学大学院で学び1947年に宣教師に任命される。*

*関東学院大学チャペル・ブリティン 第1999号 1986.11.20.

宣教師主事としての活動から

アメリカ・バプテストから戦後派遣された宣教師主事としてアキシリング、フリデール、ヒンチマンの3名をあげたが、アキシリングは戦中にいたるまで日本に滞在し、引退の年を達していたが特例として日本に派遣されていた、フリデールは戦後日本の復興状況を調査するため来日し、必要な課題を提示しヒンチマンの前任の主事を担当し、そしてヒンチマンは1950年から1964年の13年間の実際の戦後復興期の日本宣教を担当していた。日本の経済復興を背景に再び高まりを見せた国家主義や、冷戦の勃発によるアメリカのアジアにおける反共軍事体制の中でどのような背景や理念を持って活動を行ったのであろうか。アメリカ・バプテストの年次報告書である*Along Kingdom Highways*を中心に考察してみると日本の経済復興と共にナショナリズムが高まり戦争の敗北から躊躇していた自国の文化を賞賛するなど、愛国心を超えて旧来のナショナリズムが復権する状況を危ぶんでいる。教会では戦後の混乱から落ち着いてきて信仰を純粹に求める将来の教会員となる人々の姿がみられ、定着している様子が記載されている。*Along Kingdom Highways*1952

また日米安保条約調印後自由主義国への仲間入りを果たした日本が再軍備、かつての国家主義への回帰への不安が日本人の心をしめ、民主的で思慮ある国家を切望している人々も存在するが、キリスト以外に国家や個人を救うことは出来ない

する者は少ない。国家神道の古い宗教的基盤から解放された人々は（宗教的）漂流している、GHQの施策によりキリスト教の宣教の機会にも恵まれてはいたが教会の扉が開かれていない。*Along Kingdom Highways*1954.

共産主義の破壊的な活動にどう対処するのかこの時期の課題であった。公立の教科書は左翼思想と同様、右翼思想の浸透を恐れ、天皇制と日本の立ち位置を戦前に回帰させる思想が復活し、反米感情の多くはこの主張から生じている。*Along Kingdom Highways*1957.

国家主義で世俗的な社会とキリスト教をどのようにに対峙させていくのかバプテスト派として日本のクリスチャンの間で難しさを感じている。宣教計画の大きな課題は訓練した指導者を十分に支援できず、育成できなかった点にある。アメリカの政策は史上最高の軍事占領で行われたがそれは千年王国に遠く及ばず幻滅と苛立ちが始まっていた。*Along Kingdom Highways*1958.

最後に冒頭に述べた Christian opportunity in Occupied Japan 中の最も大きな計画として関東学院の高等教育機関の設立が掲げられていたが当時の理事長がアキシリングの時代からヒンチマンは理事の一人となっていた。共にキリスト教育精神を広める教育機関としての関東学院への12万ドルに及ぶ資金援助計画の賛成を得るには多大な努力を要した。アキシリングの後かつての敵国日本への莫大な献金の承認を得るためにヒンチマンは「専制的な国々と同様に民族優越主義に毒されていた人々にも、神の愛は注がれ兄弟姉妹となり得る」と日本赴任前に抱いた信念をもってアメリカ・バプテストと粘り強く交渉、説得力計画の実現を果たした。これらの背景には自身がドイツ系移民としてスパイ容疑を受けながらも人種差別を撤廃し、人間は全て兄弟であるという信念のもとに学び、ムーデイの平和主義思想を受け兵役拒否を貫いた。冷戦構図の中での共産主義とのせめぎ合い、占領軍の傘の下での宣教活動の限界、共産主義者や国家主義者、そして超国家主義者の解放があり、さらに戦後の日本の経済復興を背景に日本に根付こうとしている民主主義が、思惑を外れ経済の復興に伴う日本の国家主義への揺り戻しが起った中で困難な舵取りを担わされた。しかし、

占領軍の権威者やアメリカの代表としてではなく、イエス・キリストの友として宣教することを日本への奉仕であると捉え、ホルトムも指摘していた日本が戦争へと突き進んだ要因として日本人が持っていた国家神道による国家主義観や家族主義観、人権意識の欠如した精神構造の変革を「日本宣教特別計画」を通じて高等教育機関を設立しミッションスクールとしての大学での教育という形で実施していこうとしたことにある。日本での働きはソ連を意識したむずかしい態度決定を求められたが、その困難なキリスト教宣教の場を支えたものは、単なる戦勝国から派遣された宣教師とは異なり、日本と同様の敗戦国で同盟国であったドイツをルーツに持つヒンチマンが身をもって良心的兵役拒否を貫いてきた兄弟愛に基づく、キリストを求める中に見出そうとした平和思想であったと考えられる。

「再臨」から見る戦時下キリスト教弾圧 一灯台社、プリマス・プレズレンの 検挙を中心に一

川口 葉子

本発表は、「再臨」から見る戦時下キリスト教弾圧一灯台社、プリマス・プレズレンの検挙を中心に一」と題し、治安維持法による戦時下キリスト教弾圧に焦点を当てた。特に、拙稿「治安維持法によるキリスト教弾圧一灯台社から続く「再臨」の問題を中心に」（『キリスト教史学』78号、2024年）を参照したのち、その研究の視座に基づき、弾圧されたひとつであるプリマス・プレズレンを対象に取り上げた。以下、発表の内容を簡単にまとめたい。

この視座とは、治安維持法によるキリスト教への弾圧（一斉検挙がなされた組織的なものを対象としている）は、1939年6月の灯台社に始まり、耶蘇基督之新約教会（1941）、プレマス・プレズレン（1941）、旧ホーリネス系三教会（1942）、セブンスデー・アドベンチスト（1943）に対して行われたが、「再臨」という観点からこれらを一連のものとして捉え直すことである。従来、個別的に研究が深められてきたキリスト教弾圧について、その中心点に同じ「再臨」の問題があったこ

とを明らかにし、連続性のなかに捉えていくことを試みている。

一 治安維持法と「再臨」の問題

1925年に制定された治安維持法は、1941年に全面改訂がなされた。改訂前と改訂後、また第一条と第七・八条などそれぞれ適用されたものは異なるが、大きく理解すると、灯台社は「国体ヲ変革」する結社とされ、ホーリネス、SDAは「国体ヲ否定」する結社、新約教会は「神宮若ハ皇室ノ尊厳ヲ冒瀆」する結社とされた（個別の裁判で見れば例外もある）。プレマス・プレズレンは、「国体否定」と「神宮皇室の尊厳冒瀆」の両方が適用された記録が残っている。

この「国体否定（変革）」の理由とされたのが、「再臨」に関する問題である。当局がキリスト教弾圧全体を通して問題とした内容としてごく簡単にまとめると、①現在の国家社会は、悪魔の支配下に組織されたもので、神の意に反する。②近い将来、キリストの再臨により「地上神の国」が樹立され、現存の国家社会、その統治体制は壊滅する。

悪魔の誘惑・邪導により神に叛逆し、国家社会は悪魔の指導下に樹立されたのであり、現存の国家社会は、そのように神の意に反するため、ハルマゲドンの戦いや再臨により「撃滅一掃」される。それが日本の国体に及ぶことをもって、国体を否定・変革するものとされたのである。

二 嚆矢としての灯台社検挙

このように共通するとした内容は、キリスト教弾圧の最初となった灯台社の検挙において、当局によってまとめられた教義内容が、その後の検挙に影響を与えたと見ることができるものである。当局は灯台社の教義を、現存国家社会の組織制度を「悪魔の組織制度」として根本的に否認し、ハルマゲドンによってそれらが「撃滅一掃」されること、そして現実的な地上「神の国」の実現を図ることとして捉えた。このような内容が、続くキリスト教の検挙に引き継がれたと見ることができる。

例えば、新約教会、ホーリネス、SDAの内偵時の資料には、「悪魔の組織制度」「悪魔の組織」という用語が使われている。灯台社の検挙で使わ

れた用語が、当局によってそのまま使用されたことは、当局が灯台社の概念を敷衍しながらそれぞれの教義を理解し、それによって国体に関わる問題とされていったことである。さらに、検挙後の取り調べを経た後には、それぞれの教義に即したものにされながらも、キリストの再臨による現在の国家社会の崩壊、地上神の国建設へと至る構成は引き継がれることで、灯台社と同じように、現存の秩序を揺るがす教義であることが示されたのである。

さらに、再臨にともない天皇統治が廃止されることは、灯台社の検挙当初には明示されておらず、プレマス・プレズレンにおいて「国体の否定」の根拠として明確化されたことを端緒とするものであった。それがホーリネス、SDAの検挙に引き継がれ、それぞれの教義が最終的に「天皇統治の廃止」に至るものとされることで、国体を否定・変革する根拠とされていくのである。

このように、五回に及ぶ組織的なキリスト教弾圧は、それぞれ独立したのではなく、灯台社から一連の流れにおいてなされたこと、また、弾圧の過程で「天皇統治の廃止」が明示されるようになり、国体否定の根拠となっていくことを論文で提示した。

三 プリマス・プレズレンの検挙

以上の全体像を踏まえ、本発表では新たにそのなかの一つ、プリマス・プレズレンに目を向けた。日本におけるプリマス・プレズレンは、それらの集会の多くが名前をもたず、組織としての実態も正確に捉えるのは難しいが、発表時には、A-1としてキリスト同信会、A-2-1として東ヶ崎菊松らのグループ、A-2-2として平野栄太郎ら盛岡のグループ、Bとして築山好太郎・藤本善右衛門らのグループとした。それぞれのグループの詳細は省略するが、戦時下に検挙されたのはこのうちBのグループである。

いくつかのグループのうち検挙されたのは一つだけであった理由は、神社参拝や宮城遙拝などの問題にあり、それらを偶像崇拜として退けたBのグループ、さらに特に厳格であったBのうちの一つの集会が第二次検挙で対象とされた。思想的・信仰的内容としてはこれらのグループに大きな違いはなく、偶像崇拜は避けるべきことであること

も共通認識であったが、それをその通りに行うかどうかは違いとなったのである。

先の論文で、プリマス・プレズレンの検挙では、「国体否定」だけではなく、「神宮皇室の尊厳冒瀆」も同様に問題とされたことを示したが、実際の検挙者は偶像崇拜拒否を明確に表し、それを厳格に守った集会が特に標的にされた。そのことは、「国体否定」という思想的内容だけでは問題とされなかったことを意味する。その後のキリスト教弾圧（ホーリネス、SDA）は主に「国体否定」だけが取り上げられるようになるが、それはキリスト教弾圧が進んだ表れと言えよう。

質疑応答では、プリマス・プレズレンについての研究をされた数少ないお一人である岡部先生が様々な補足をしてくださり、また参加者から内容についての質問やご自身の経験からのコメントもいただき、続く研究への励みとなった。

「平田篤胤とキリスト教 ——キリスト教受容の一側面として」

藤原 直美

江戸後期の国学者、平田篤胤の思想には洋学の影響があると指摘されている。特にキリスト教との関わりは、これまで多くの研究者から注目されてきた。本発表では、篤胤のキリスト教摂取を検討するため、彼の著作である『本教外篇』に焦点を当てる。従来の研究では、『本教外篇』の刊本を基に篤胤の思想が分析されてきたが、本発表では草稿と写本、刊本との比較を通して、篤胤のキリスト教理解の再考を試みる。さらに、キリスト教摂取を通して篤胤が何をしようとしていたかを考察する。

篤胤著作でキリスト教に関連した用語が現れるものとしては、『本教外篇』のほか、『古道大意』、『靈能真柱』、『古史伝』がある。例えば、『靈能真柱』には「遙か西の極なる国々の古き伝に、世の初発、天神既に天地を造り了りて後に、土塊を二つ丸めて、これを男女の神と化し、その男神の名を阿陀牟^{あだむ}といひ、女神の名を延波^{えは}といへるが、此二人の神して、国土を生めりといふ説の存るは、全く、皇国の古伝の訛と聞えたり」と、創世記のアダムとエバの話が出てくる。それだけではなく、

バビロンの言語擾乱やノアの洪水についても述べられている。こうしたヘブライ古伝は、篤胤著作の中で晩年まで援用されていた。だが、ヘブライ古伝とは異なる形でキリスト教が摂取されたのが、『本教外篇』である。この書では、キリスト教の教理が篤胤自身の説として述べられている。そして、上掲の著作の中で『本教外篇』だけが、「未許他見」と記され、幕末まで公開されなかったのである。

『本教外篇』は上下二巻の著作である。上巻は冒頭に漢詩が置かれている以外はすべて和文であり、下巻はすべて漢文（訓点つき）である。内容の摂取元は、マテオ・リッチ（利瑪竇）の『畸人十篇』、ジュリオ・アレニ^{がい}（艾儒略）の『三山論学紀』、ディエゴ・パントーハ^{ばんていじょ}（龐迪我）の『七克七書』であることが、村岡典嗣と伊東多三郎によって明らかにされ、海老沢有道が整理している。『本教外篇』は、篤胤の自筆草稿が残されており、その他に江戸期の写本が4点確認されている。これらの比較を通してわかるのは、草稿から写本の段階でかなり簡略化されていることである。最も異なっている点は、草稿には冒頭の漢詩がないことである。これは後に門人が付け加えたと考えられ、恐らく矢野玄道^{はるみち}が編集したのであろうと推測される。

では篤胤は、こうしたキリスト教摂取を通して何をしようとしたのだろうか。篤胤の思想を振り返ってみよう。篤胤の代表作である『靈能真柱』では、大和心を定めるためには死後の靈魂の行方を知る必要があるという主張がなされている。そのために、上巻では宇宙（天・地・泉）の生成を、下巻では主に顕幽論を説いている。また篤胤は、庶民に馴染み深い祖先祭祀、因果応報、地獄などの宗教的諸概念を積極的に取り入れた。それが功を奏して、短期間で全国的に知られるようになったのである。篤胤が行った多様な要素の取り込みと、それによる復元の試みの例としては、古伝だけでなく易学研究も挙げられる。篤胤によれば、中国の古代文明を開発したのは大国主神と少彦名神であり、大国主神の分霊である大物主神（大名牟遲神）は古代中国では太昊伏羲と呼ばれ、神人交通の秘儀である易を伝え、中国神仙界は少彦名神が開発、主宰していることになっていた。だから易学も研究したのである。

一方、篤胤の古伝に対する認識はどのようなものだったのだろうか。篤胤は、『靈能真柱』が上梓された文化年間には、皇国の古伝こそが正しく、外つ国の古伝は訛れるものと述べていたが、文政年間以降、外国の古伝に対する研究が進展するにしたい、それまでとは異なる理論を提示し始める。「抑、天地世界は、万国一枚にして、我が戴く日月星辰は、諸蕃国にも之を載き、開闢の古説、また各国に^の存り伝はり、互に精粗は有なれど、天地を創造し、万物を化生せる。(…)我が古伝説の真正を以て、彼が古説の訛りを訂し、彼が古伝の精を選びて、我が古伝の闕を補はむに、何でも事なき^{ことわり}謂なれば」(『赤縣太古伝』)と述べる。篤胤は晩年にかけて全世界の古伝の収集、比較検討という困難な作業を行っていくようになるが、それはこうした考え方を持っていたからである。遠藤潤は、「これら一連の著述活動によって篤胤が目指したのは、世界のすべてを覆うものとして神道を意味づけることだった」、「この姿勢は一見あらゆるものを見ようとする寛容性を帯びているが、結局すべてを日本の古伝・神道へと還元するものであった」と考察している。

つまり篤胤は、古今東西の様々な要素(古伝を筆頭に易学・天文学・医学などの知識、習俗、霊的現象など)を蒐集しては、自らの思い描く日本中心のコスモロジーに合わせて再構成しようとしたのである。キリスト教もまたその中に組み込まれる要素の一つに過ぎず、ヘブライ古伝も有用なテキスト群であったと考えられる。篤胤は、外国(とつくに)を異国(ことくに)と呼び下には見たものの、自らのコスモロジーに組み込む必要があったため、必ずしも排撃しなかった。皇国の一部(あるいは訛伝)としての位置を付与するという形で包摂したのである。外国を単に蔑視して付き合わないのではなく、外国のものでも良いものなら使ってもいいというスタイルは、自国のプライドを保持したまま、外国と付き合っていく際の言い訳(口実、理由づけ)としても機能したであろう。外国の神は日本の神が渡っていったものだという捉え方は、開国していく恐ろしさを軽減したと考えられる。篤胤の時代は、海岸にロシアやイギリスの船が現われ通商を求めるなど、対外危機が意識される状況となっていた。そうした局面では、欧米に対しても堅固に対抗しうる国になる

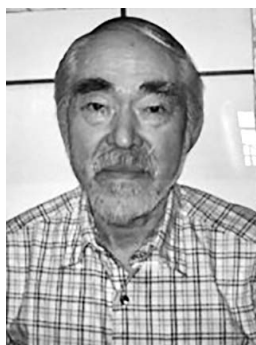
必要がある。

『靈能真柱』の重要なテーマは「霊の行方の安定(しづまり)」であり、大倭心(やまごころ)を安定させ堅固なものにするためにと、死後の魂が行く幽冥の世界が述べられているが、篤胤が示した世界観もまた、もう一つの「心の安定」を目的としたものであったのではないか。すなわち顕明の世界のコスモロジーを提供しようとしたのではないかと考えられる。

※この発表内容は『東京大学宗教学年報』第42号に掲載予定の拙稿「国学とキリスト教の交錯—平田篤胤のキリスト教摂取—」の一部を概説したものである。

宮田皓旦さんを偲んで

岡部 一興



2024年11月10日逝去
享年91

宮田さんと私との出会いは指路教会においてであった。宮田さんは小学校5年生の時、福島県土湯温泉に学童疎開、食事はみそ汁とご飯一杯ということで栄養失調に追い込まれ、彼の家に奉公していた職人さんが住む埼玉県太田村に疎開した。

宮田さんは、疎開の食糧難時代の経験から物を大切に、特に食べ物を粗末にしない習慣が出来あがった。その後、青山学院大学英文文学部に進み、アルバイトをしながら学業に励む苦学生であった。それでも、「フランス文化研究部」や「青山トロージャン」クラブで大学生活を満喫した。

「トロージャン」では、音楽祭にペギー葉山を呼びトミー時田とは同じクラスであった。宮田さんとキリスト教の出会いは、関内にあった「コイノニア・コーナー」に勤務したことと関係があった。大学卒業後、3年ほど勤務、「コイノニア」は進駐軍の人たちの交流の場で、機会あるごとにイベントを企画、この責任者であったシアーズ牧師から影響を受け、1960年4月17日のイースター

礼拝で村田四郎牧師から洗礼を受けた。1964年2月、岡田敏子さんと結婚、その出会いは「コイノニア」に敏子さんが訪れたことから交際が始まったという。「コイノニア」が閉鎖された後は、「エバーレット汽船会社」から「ルフト・ハンザ航空」に勤務、ここをリタイアした後も72歳まで貿易会社に勤めた。リタイア後は、石川町駅近くの「寿」に関わり、毎週金曜日に食事のサービスを行うボランティアに精出し、年末年始の夜回りなど亡くなる少し前まで奉仕していた。また「ナルク」という日本アクティブ・ライフクラブという2万人の会員を擁する組織の横浜支部の事務局を担った。さらに、「俳句同好会」、「コール・ダンヘル男子合唱団」に所属していた。毎週木曜日に練習し、老人ホームに出向いて歌う同好会で、その訪問は100回を超えたという。

横浜プロテスタント史研究会では、当初からの会員で、毎回研究会に出席していた。1990年から研究会の場所を横浜開港資料館から横浜指路教会に移したが、会場の準備、整備を率先して下さった。教会では、執事を担い、教会史編纂委員会のメンバーとして、宮田さんと一緒に教会史の資料の整理にあたり、『横浜指路教会百二十五年史』の編纂委員、『横浜指路教会150年史』の編集委員としても活動した。宮田さんの愛称讃美歌は、「やすかれわがこころよ」（讃美歌21・532番）でした。「なみかぜ猛るときも、恐れも悲しみも、みむねにすべて委ねん」、「イエスはともにいます」という歌詞があるが、穏やかで、自分を低くして歩む宮田さんそのものを表しているような讃美歌であるように感じている。宮田さんは走るべき道を走り、召されました。親しい宮田さんがいなくなって、ぽっかりいと穴が空いたような寂しさを感じるこの頃である。

佐々木敏郎牧師 逝く

花島 光男

佐々木敏郎牧師が2025年4月8日逝去された。94歳であった。

岩手県遠野市の出身、青山学院大学基督教学科入学し、1951年、四谷新生教会で友井楨牧師より霞ヶ丘教会菅谷仁牧師の息女百合子さんと一緒に

バプテスマを受けた。米国バークレイ・バプテスト神学校に留学し、帰国後に百合子さんと結婚、1962年日本バプテスト同盟霞ヶ丘教会の牧師に就任した。当時、霞ヶ丘教会は関東学院三春台校地の中に会堂、牧師館があり、佐々木牧師はそこに長く住んでおられた。霞ヶ丘教会は戦前においては関東学院教会で、学院の講堂や教室を使用して聖日礼拝をし、当初は高谷道男氏が牧師の役割を担当している時もあった。戦後に、霞ヶ丘教会となり三春台にあって、坂田祐院長以下、学院の関係者、教職員が多く出席し1970年代頃までは関東学院と日本バプテスト同盟をつなぐ結節点として、存在感のある重要な教会であった。佐々木氏はそれ以前より関東学院大学講師を勤め、さらに関東学院中高での聖書科講師、関東学院六浦小学校校長など教会牧師と学校教師を担当された。私も、横浜転居後しばらく霞ヶ丘教会に通ったが、優しく語りかける説教が印象深く思い出される。

研究会においては、その契機となった1979年の市民グラフ横浜、ヘボン特集号に執筆、研究会創立時からの原会員である。佐々木氏はその前年研究のため渡米、その際、セントルイス市にゴープルの墓を訪れたことを、このグラフに記している。墓地の埋葬記録では、従来日本で伝えられている没年月日が違うことを発見、埋葬された場所に墓石はない。しかし同じ場所に多くのバプテストの牧師と一緒に埋葬されていることを確認したと記している。1978年、ICUで開催されたキリスト教史学会大会で発表された内容とはほぼ同じであるが、牧師らしい詩的で感情のこもった文章であった。

研究会発足当初、佐々木氏は毎月のレギュラーな出席者であり、2年間に一度くらいと、かなり頻繁に研究発表をしていた。その主な内容は日本バプテスト史、プロテスタント史全般とかなり幅広く多くの情報・話題を提供された。1991年牧師退任後も関東学院大学法学部教授、彰栄学園の園長、理事等、教会と学校など多数の場で牧会、教育に励まれた。

また佐々木氏は読書家・蔵書家としても知られていた。最近では健康上の事情ではば外出されることもなく、研究会の出席もできずに過ごされておられた。

葬儀は4月13日前夜式、14日告別式が霞ヶ丘教会山崎清美牧師により行われ、教会関係者等多数

の参列者があった。

現在の霞ヶ丘教会は関東学院三春台校地の整理により隣接の旧宣教師館跡地に建設された坂田記念館に移り、二階の礼拝堂を使用している。また現在の関東学院教会は戦後、六浦校地において新たに大学神学部と共に始まったものである。

2024年度 横浜プロテスタント史研究会 総会議事録

開催日時：2025年3月15日（土）

定例研究報告会後 15：30～15：40

場 所：横浜指路教会礼拝堂

議 長：岡部一興代表

書 記：中島耕二役員

出席者：会員15名（1名Zoom）

議 事：

議長から「横浜プロテスタント史研究会規約」および「2024年度横浜プロテスタント史研究会会計報告」を配布のち、下記提案が行われた。

当研究会財政について、2023年度は次年度繰越金が¥115,301あったところ、2024年度は講師謝礼、印刷代、通信費、Zoom料金等経費が増え、次年度繰越金は¥24,256と激減した。ついては、2025年度以降の財政を考え、研究会年会費を従来の¥2,000から¥3,000に改訂（値上げ）したい。

会計責任者の中村早苗役員から、研究会財政について「会計報告」にもとづき詳しい説明が行われたのち、賛否の挙手採決が行われ、結果出席者全員の賛成を得て提案通り可決された。

*規約 第8条 総会の決議は出席者の2分の1以上の賛成をもって行うものとする。

【事務局報告】

1. 会員の異動報告

①入会者

石崎康子：2025年3月19日

金環煥（キム キョハン）：2025年3月21日

川口葉子：2025年3月28日

上野麻彩子：2025年4月11日

②退会者

榎本 毅：2025年3月31日

③逝去者

佐々木敏郎：（2025年4月8日）94歳

2. 会費の値上げについての報告

2025年4月より会費を2,000円から3,000円に値上げした。

3. 総会を行った。

横浜プロテスタント史研究会規約

第1条 当会は横浜プロテスタント史研究会(The Study Society of Protestant Christianity History in Yokohama)と称する。

第2条 当会は1981年10月、横浜開港にともなうキリスト教史の研究をもって創立されたが、現在は当初の目的から研究の範囲が広がってキリスト教史全般を対象とする研究と交流を図ることを目的とする。

第3条 会員から会費を徴収するものとする。

第4条 当会の役員は、7名の運営委員によって構成される。その中から互選により会の代表と会計責任者を選ぶ。

第5条 役員の選出は、総会において選出するものとする。

第6条 役員の任期は3年とする。

第7条 総会は代表が招集するものとする。会計責任者は、総会において会計に関する報告を行うものとする。

第8条 総会の決議は出席者の2分の1以上の賛成をもって行うものとする。

第9条 当会の活動は次の者を主なものとする。

(1) 月例会を持つ

(2) 横浜プロテスタント史研究会報の発行、研究科の案内の発行

(3) その他の活動

第10条 本会の会計年度は、4月1日に始まり、翌3月31日に終了する。

附 則 本規約は2008年4月から生ずるものとする。

2022年4月一部改正

2025年3月一部改正

【編集後記】

日本は教会、学校、福祉のみならず文化、社会等、沢山の事をアメリカの教会から受け、教えられた。戦後のララも然り。自由で明るく大らかなアメリカ人氣質、それ故アメリカに親しみを持ち感謝、憧れがあった。しかし今のアメリカは？時代が変わった。（花島光男）